

日本の未来を見据えて撃つ！
そんなあなたにホットな話題をお送りする
最先端オピニオン紙

日本シティジャーナル

発行: ネットハウス
〒286-0825 千葉県成田市新泉 14-3
TEL 0476-89-2333 FAX 0476-89-2334
[平日: 10:00~19:00、土曜: 12:00~17:00]
<http://www.nihoncity.com>
成田市、佐倉市、印西市、富里市、香取市、山武市、船橋市
千葉市(花見川区、美浜区)、習志野市、八千代市、西柏原市
高千穂町、茨城、小林、安良、多古町、横芝光町、芝山町、神崎町
発行部数: 500,000部

日本語表記の移り変わり

平仮名がヘブライ・パルミラ文字から創作された経緯と根拠!

現代の日本語は、漢字、平仮名、片仮名、そして時にはローマ字も含む4種類の文字を用いて表記されています。漢字は元来、中国で発祥した文字であり、ローマ字も海外に由来する文字であることは一目わかります。それら2種類の外来の文字に加えて、漢字を参考にして創作されたと考えられてきた平仮名と片仮名が、日本特有の文字として平安時代から存在するというのが通説です。しかしながら、平仮名と片仮名は同等の発音を持つ表音文字であり、何故、2種類の重複する表音文字が作られ、今日までこれらが漢字と混在しながら日本語の表記に活用されてきたのか、不可解に思われる方も少なくないはずです。しかもこれらの仮名文字は、時代と共にその用いられ方が大きく異なっていくのです。

平安時代に創作された日本固有の文字である平仮名は、当時漢字の読みを記載する目的で普及し始めていた万葉仮名にとって代わり、特に和歌や歌謡の作品、女流の物語において用いられました。そして、当初は漢文に入り混じりながら、主に文章の流れと読みを補佐するために使われました。平仮名を漢字と共に併用して文章を思うままに綴ることに、当時の作者らは何ら躊躇することはなかったようです。平仮名が瞬く間に普及したということは、それ程までに、日本語を発音のままに文字表記することが、長年望まれていたことの証でもあります。平仮名は、独自の文字列のみでも文書を表記することを可能とした表音文字であることから、いつしか、日本語表記の大切な一部分として定着します。

平仮名は今日の学校教育においても、最初に学ぶ日本語の文字として重要視されています。字母表にまともな仮名の数は、元来いるのは47字にヤ行の工を加えた48字です。平仮名を「いろは」から学ぶ時代は長く続き、つい昨今まで、諸々の辞書においても仮名文字は、「いろは」の順で並べられていました。そして明治時代に至り、小学校令施行細則においてヤ行の工が、「ん」として代えられて字母表にまともな仮名の時代から五十音図の表記を用いて平仮名が学ばれ

ようになりました。しかしながら、平仮名が仮名文字の主流となったのはごく最近のことであり、戦前まではむしろ、片仮名を漢字と併用する文章が主流でした。戦前の文献には片仮名が多用されているものが多く、当時の日本語教育が片仮名の読み書きを基本としていたことは、国語の教科書からも伺えます。国内最初の国定日本語教科書である明治時代の尋常小学読本の編纂趣意書には、日本語の発音を学ぶためには、「児童ノ学習ニ易キ片仮名ヨリ入リタリ」と記載されていました。片仮名の方が児童にとっても学びやすい文字形であったことから、子供達はまず、片仮名を覚えてから、平仮名を「いろは」によって学んだのです。

その片仮名を主体とした日本語教育の流れが戦後、一変します。これまで主流となっていた片仮名による仮名遣いが、平仮名に差し替えられたのです。これはおそらく、戦時中の公文書や勅令等に片仮名が多用されたことから、それらがかもしだす過去の暗いイメージを払しょくする為の勇断ではないでしょうか。およそ固いイメージに映る片仮名よりも、丸味を帯びて優しい形状の文字に受け止められる平仮名を50音図の文字として差し替えることにより、新しい時代の幕開けを訴えることができたのです。こうして時代の流れと共に、仮名文字の主役が移りました。それ以外にも、何故、片仮名と平仮名、2種類の表音文字が古くから日本に存在したのでしょうか。その謎を紐解くためにも、まず仮名文字のルーツであると言われてきた漢字文化の流れについて、振り返ってみましょう。

仮名文字の土台となる漢字文化の発展

日本に漢字が紹介されたのは古墳時代の中期にあたる5世紀から6世紀にかけてのことと言われています。しかし中国の史書にも記載されているように、2-3世紀、邪馬台国の時代においては既に中国からの使者が倭国を訪れていただけでなく、実際にはそれ以前の時代に遡り、中国で教育を受けたと考えられる秦氏らを中心とする渡来人が朝鮮半島を経由して大勢日本に訪れていま

した。それゆえ、遅くとも1-2世紀には日本列島に漢字が紹介されていた可能性があります。いづれにしても漢字文化は序々に古代の日本社会に浸透し、飛鳥、奈良時代においては、古事記や日本書記に見られるような中国語に準じた漢文が、日本における文字表記の主流となりました。高度な古代文明を持つ中国の文化が流入することにより、古代の日本社会において、漢字で書かれた中国語の漢文を学びながら読み書きをする文字文化が発展していったのです。

その大陸をルーツとする文字文化を吸収する原動力となったのは、言うまでもなく中国大陸から朝鮮半島を経由して日本に訪れた大勢の渡来人です。漢文が日本に導入される過程において、既に漢字を流暢に使いこなすことのできた中国大陸からの渡来人の影響を多大に受けたことは言うまでもなく、渡来系の学者や書記官の存在は、古代日本文化の発展に欠かせない存在でした。それら渡来人の中には前述したとおり、秦氏のように中国大陸にて高度な教育を受け、長い年月を経ながら大陸を東へと移動し、満を持して日本へ渡来してきたユダヤ系の移民も含まれていました。こうして大陸の文化を積極的に吸収していく最中、それまで文字の文化が普及していない日本では、中国語を規範とする漢文を読みこなすために漢字を習得することが、急務となつたのです。そして、支配階級層においては漢文を習得した書記官や文才に長けた学者が優遇され、国家の統治、及び文化の形成に多大なる影響を与える文献がまとめられていくことになります。

また、漢字が日本に紹介されたのが4世紀前後という定説を前提と考えれば、それから仮名文字が草創されたことされる平安時代まで、少なくとも500年という長い年月が経っていることにも注目です。その長い年月こそ、大陸から漢字文化が日本に持ち込まれた後、それをすぐに日本語化する必要がなかったことの証であり、大陸系の渡来人が、古代日本の文化を育む責務を担っていたことを裏付けていると言えるのではないのでしょうか。もし日本民族が渡来

人とは一線を引いた別人種であるとするならば、世を超えてまで500年以上の長い期間、外来の漢字で書かれた中国語の漢文を、ひたすら学び続けるとは到底考えられないのです。それは自国民のプライドに関わることであり、日本人特有の創造性、国民性からしてみても、想像し難いものです。それではなぜ、漢字文化が列島に持ち込まれた後、それをベースにして文字の日本語化を進めようとする兆候がすぐに見られなかったのでしょうか。もっと早くから日本語の発音に当てて訓練みできる漢字を選別するような試みがあったらどうか。

漢字を日本語化し、日本語として読みこなしていくような形跡が、奈良、平安時代に至るまでの長い歴史の間、殆ど見あたらないということからしても、当時、渡来人と倭人、もしくは日本人を明確に線引きできるような人種の相違点は存在しなかったのかもしれない。そして怒涛のごとく押し寄せる渡来人の波が、既存の倭人の数を圧倒していくうちに、いつしか文字文化においても漢文が標準化されるようになって

たと想定されます。それは、漢字文化を持ち込んだ渡来人自身が、日本人ルーツの一端を担うべく、古代文化の形成に貢献しなげく、古代文化に同化し続けたことも意味します。渡来人の文化そのものが列島に流入することにより、古代日本の文化が育まれていく姿を、日本語の文字の歴史からも学ぶことができます。

漢文で書かれた「日本書記」と「古事記」

渡来人がもたらした中国の文字文化と古代日本のものとは紙一重であることの証を、誰もが聞いたことのある日本最古の文献として名高い「古事記」と「日本書記」に見出すことができます。日本書記は奈良時代、720年に完成した日本最古の正史です。実際には聖徳太子が書いたと言われる「国記」や「天皇記」なども存在したことが史書の記述からわかっていますが、それらは消失してしまいがち、実態は不透明のまま今日に至っています。天皇の命を受けて編纂された日本書記は、おそらく中国系の書記官、学者の手によって書き綴られたことでょう。日本語に準じた漢文として

(表1) 平仮名のルーツとなる古ヘブライ・アラム文字

	フエニキヤ文字 (前四世紀)	ヘブライ語オストロフ (前六世紀)	古アラム文字 (前六世紀)	帝国アラム文字 (前五世紀)	死海文書 (前二世紀)	パルミラ文字 (前一世紀~三世紀)	ヘブライ文字
A	א	א	א	א	א	א	א
B	ב	ב	ב	ב	ב	ב	ב
G	ג	ג	ג	ג	ג	ג	ג
D	ד	ד	ד	ד	ד	ד	ד
H	ה	ה	ה	ה	ה	ה	ה
V	ו	ו	ו	ו	ו	ו	ו
Z	ז	ז	ז	ז	ז	ז	ז
KH	ח	ח	ח	ח	ח	ח	ח
T	ט	ט	ט	ט	ט	ט	ט
Y	י	י	י	י	י	י	י
K	כ	כ	כ	כ	כ	כ	כ
L	ל	ל	ל	ל	ל	ל	ל
M	מ	מ	מ	מ	מ	מ	מ
N	נ	נ	נ	נ	נ	נ	נ
S	ש	ש	ש	ש	ש	ש	ש
O	ו	ו	ו	ו	ו	ו	ו
P/F	פ	פ	פ	פ	פ	פ	פ
TS	צ	צ	צ	צ	צ	צ	צ
Q	ק	ק	ק	ק	ק	ק	ק
R	ר	ר	ר	ר	ר	ר	ר
S/SH	ש	ש	ש	ש	ש	ש	ש
T	ת	ת	ת	ת	ת	ת	ת

受け止められがちですが、実際は、ほぼ中国語として理解できる格調高い漢文として書かれています。そこで用いられている言葉の流れ、修辞上の体句などは漢文に倣っているものであり、倣習とよばれる日本語化による漢文の誤用や奇用は最小限しか見られません。よって日本書紀は、ほぼ純漢文体、すなわち中国語によって記載された史書と言えます。

勅撰の正史である日本書紀に並び、712年に献上された古事記は最古の歴史書として知られています。古事記も基本的には漢文で記載されていますが、その中に含む中国語の度合いと日本語化の様相は、日本書紀と比較すると相違点が多く見受けられます。古事記では倣習の傾向が日本書紀よりも強く見られ、特に古代から伝承されたと考えられる民謡、歌謡や固有名詞など、漢文では表記しづらい文面においては、一字一音表記で記されているのが特徴として挙げられます。古事記の解釈が難しいことは、古代の編纂者である太安万侶が古事記の序文で、訓によって述べて「詞不逮心」、つまり言葉が心にしっくりとこず、また、音訳で表記しても「事趣更長」、すなわち文章が長くなること記述したことから可知することができます。実際、中国語と日本語のハイブリッドのような側面を持つ古事記の解釈は難しく、およそ訓読みできる日本語化された漢文として理解できる箇所や、音訳でしか理解できない歌謡などの文面も多々混在していることから、様々な角度から読みこなしていく必要があります。古事記の存在は、長い年月をかけて漢字本来の読みである音読みに、日本語的な訓を交えながら、文字の日本語化が進んだ証でもあるのです。

文字の日本語化を先駆けた万葉仮名

その後、日本語での発音をわかりやすく表記するための手段として、漢字そのものを大胆に振り仮名として用いる試みが始まり、それが万葉仮名と呼ばれる漢字表記による振り仮名の発端となります。漢字が列島に普及し始めてから長い年月を経た平安時代において、漢文を難なく読みこなすことができる学者はもはや、多くは存在しなかったことでしょう。また、中国語をベースにした漢文では、どうしても日本語の想いを正確に伝えることができないことは明らかでした。それゆえ、漢文を日本化する努力がなされるにつれて、日本語としての読みをわかりやすくする為、万葉仮名という手法が用いられ始めたのです。万葉仮名の字形は、基本的に元来の漢字と同等ではあるものの、漢字に付随する仮名文字として書き入れるため、文字を早

く、また簡潔に記載する工夫を凝らすことが不可欠でした。その結果、万葉仮名の書体は少しずつくずれ、漢字はいつしか万葉仮名の草の仮名に変化していきます。こうして万葉仮名の進化に伴い文字の日本化に伴うオリジナリティーが見えてきたのです。

しかしながら、所詮、漢文表記が主体となっている文面であることから、万葉仮名の活用には限界がありました。特に、日本語の特色である活用語尾や、「いる」「ある」などの助動詞、また「てにをは」に代表される助詞を書き記す必要性にも迫られ、漢字文章だけではどうしても日本人特有の心情、気持ちまでも書き表すことが難しかったのです。「てにをは」の語源は、漢文を読む際の補助となる四隅に記載されたマコト点であることからしても、漢文を解釈する際の補助がいかに重要であったことがわかります。万葉仮名の普及は、漢字に付随する文字の活用法の限界や不便さを知らしめる結果となり、いつしか日本語を表記するにふさわしい、日本独自の文字を創作することの重要性が再認識されたのです。その結果、日本固有の文字として創作されたのが、平仮名です。

歴史に影を潜めた片仮名の存在

ごく一般的には平安時代に平仮名が草案され、その後、漢字の一部をとって片仮名が作られたと考えられています。しかし漢字が日本列島に紹介されてから、仮名文字が草案されるまでの5世紀以上ものぼる長い年月の間、果たして本当に漢字以外の文字が使われることはなかったのでしょうか。古代日本において漢字が普及した理由は、次々と大陸から訪れる渡来者の多くが漢字文化圏の出であり、流入する文化の中心が中国系であったことに尽きます。そして、それらの多彩な大陸文化はいち早く列島各地に紹介され、中国語による漢文は、日本語圏に浸透していくとともに、特に支配階級層にとって政治や文化を語る際には、もはや無視することができない不可欠なコミュニケーションのツールとなったのです。実際には国内の支配階級層の多くが中国語を理解する渡来系であったと想定され、政治に関わる書簡や記述、そして学問の学び等は、全て漢文により執り行われていた時代があったと推測されます。つまり、渡来人の影響を多大に受けた古代の日本社会では、早くから漢文が一種のステータスシンボルとして定着し、日本語独自の表音文字を考案する必要性に迫られることはなかったのです。

しかしながら、中国大陸からの渡来人の波が押し寄せると同時に、列島内には既に、独自の文

字文明を培ってきたイスラエルからの移民が土着していました。北方を中心に土着していたアイヌ系民族の存在は広く知られていますが、それら先住民に加え、前7世紀前後にイスラエルから渡来したヘブライ系民族は、文字文化を携えて列島に到来していたのです。よって、西アジアからの文化が列島内で開花するのは、もはや時間の問題でした。ヘブライ系民族の間では、日本語をその発音通りに表記する必要性から、およそ早くからヘブライ系の文字を用いられていた可能性があります。古ヘブライ文字や古アラム文字を流用して、日本語の発音をそのまま書き記すことは、決して難しいことではなかったからです。それが後世において片仮名の原型となったと考えられるのです。実際に片仮名の文字形状を比較検証すると、全ての文字形が古ヘブライ・アラム文字に酷似していることは一目瞭然であることとしても、信じよう性は高いと言えます。

ところが、中国大陸からの渡来者が朝鮮半島を経由して九州方面から大勢、列島に移住し始め、時代が大きく移り変わり始めた二、三世紀以降、いつしか漢字のみを活用した漢文が、渡来系の学者を介して支配階級に急速に広まっていきました。そして朝鮮半島を経由して訪れる渡来者の数が徐々に増加し、九州から四国、山陽地方、そして近畿地方へとその影響力が広がりをみせるにつれ、それまで列島に息吹いていたユダヤ系文化は、圧倒的な存在感を見せ始めた渡来者の影に、その存在を潜めることになりました。イスラエルから渡来してきた移民の多くが信仰上の理由により、高地性集落、すなわち山上に住む傾向があったことも、古代に渡来したイスラエル系移民の存在感と影響力がなかなか新しい世代にまで及ぶことがなかった理由の一つでもあります。怒涛のように押し寄せた中国大陸からの渡来者文化が列島全体に影響力を及ぼし、漢文が普及し始めた結果、ヘブライ・アラム文字を流用した文字の存在は、何世紀もの間、歴史にその姿を現すことがなかったのです。しかし前七世紀から始まった皇族の歴史はイスラエルから渡来した王系の民と共にあり、ユダヤ系文化はしっかりと列島に根付いていたのです。そして渡来人の波が押し寄せる最中、同時にユダヤ系同胞も朝鮮半島から大勢渡来し、同じイスラエルのルーツを持つ民は、その優れた知恵と文化を、歴史の歩みの中で開花させていくのです。

片仮名と平仮名が創作された背景

数世紀にわたり、一説では百万とも百五十万とも言われる

膨大な数の渡来人が日本列島に訪れたと言われていて、その後、歴史の流れと共に、中国語を母国語とする渡来者一世の割合は必然的に減少しました。その結果、それまで当たり前で普及していた漢文を自由に読みこなすことができる民が少なくなってきたのです。元来、高度な教育を受けていなければ到底、理解することのできない漢文ですが、治政に関わる支配階級層の中でも、未だ十分に日本語化されていない漢文を流暢に読みこなすことは、至難の技として受け止められる傾向が見えてきたのではないのでしょうか。その為、漢文を日本語化し、意味をなす文章として訓読できるよう、その注釈となる補助用語を必要としたのです。そこで考案されたのが、漢字を振り仮名として用いる万葉仮名です。この工夫により、それまで読みづらかった漢字文章も、およそ理解できるようになりました。しかしながら、万葉仮名を用いても所詮、漢文という中国語を基本にした文章構成は変わらず、漢文のみで日本語の細かなニュアンスや、些細な表現を書き表すことは不可能でした。

そこで、漢字では表記しることのできない、細かな日本語独自の言いまわしを表記するための文字の創作が望まれました。奈良、平安時代においては時代の流れと共に、秦氏らの影響力を強く受けていた学者が多数、朝廷界隈において活躍していました。彼らは漢文を流暢に理解できただけでなく、日本列島の先住者であり、最古の移民の群れとも言える同族のイスラエルからの渡来者が、ヘブライ文字やアラム文字の文化を携えて日本に到来し、それらの文字を用いて日本語の発音を表記することができるとも知っていたと考えられます。自らの民族が踏襲してきた文字文化に由来するアルファベットに、日本語の発音に準じた「アイウエオ」の母音を付加するだけでなく、簡単に日本語を表記することができたのです。それ故、日本語を表記する為に、古くからヘブライ文字やアラム文字が用いられていた可能性があります。いずれにしても、漢文を日本語化するために必要な仮名文字として、これら西アジア系の文字を活用した文字列が、いつしか片仮名の文字としてまとめあげられ、遅くとも平安時代には公的に活用されるようになりました。

片仮名は、ユダヤ系の民にとってはごく自然に読み書きできる文字であっただけでなく、誰でも覚えやすいシンプルな文字形であったことから、公の場で使われ始められた直後から、漢文訓読の補助的な役目を果たす文字として、すぐに普及しました。片

仮名は日本語の表音文字として漢字表記にプリントし、漢字だけでは成し遂げることのできなかった文章の日本語化をおよそ実現したのです。その結果、公文書に多用されるようになっただけでなく、学問や、様々な研究における文献においても活用されたのです。こうして漢字と片仮名を交えた文章表記は、平安時代をはじめとして、鎌倉、室町時代へと、そして近年では明治時代、戦前にまで続きます。

ところが、漢字と片仮名による文章を理解する為には、どうしても多くの漢字を学ばなければならず、それでも漢文の影響の度合いによっては、その文章内容を理解することは容易くなかったのです。また、遅くとも7世紀には用いられ始めた万葉仮名も、日本語を書き現す為の補助表記としては役立つものの、所詮、漢文表記が主体の文章構成の上に成り立っていたことから、やはり、漢字の理解が大前提にあったのです。よって、いくら片仮名を多用して文章の表記を補ったとしても、このままでは中国の文字文化に日本が覆い尽くされてしまうような一種の危機感が生じたのではないのでしょうか。片仮名を補助的に用いても、十分な日本語化を進められないことは明らかでした。

その問題を重要視したのが、語学の達人である空海、こと弘法大師です。自らがイスラエル系阿刀氏の出自であり、幼き日々を四国の香川で過ごした空海は、奈良で活躍する著名な僧侶らを親族に持ち、多くの経典を学ぶ機会に恵まれただけでなく、伯父を通して皇族とのつながりも持っていました。そして都を造る際に手腕を振るった秦氏を中心とするユダヤ系渡来者とも交流を持っていてと考えられます。その後、遣唐使として中国にて景教を学んだ空海は、「言葉が神」であり、言葉には神の霊が宿ることに確信を持つこととなりました。空海にとって、言葉は命であり、言葉は神でした。それは正に新約聖書ヨハネ伝に書かれている通りであり、後に真言宗と命名した根拠でもあります。それゆえ、人々の魂に潤いを与え、命の言葉を多くの人々に宿すために、空海はひたすら文章を綴り続けることを、天命と心得たのです。

ところが当時の古代日本社会では、人々は日本語を話すものの、それを読み書きする手段を知らない民が殆どでした。また、漢字の習得には時間と労力がかかるため、大切な神の言葉を、漢文を用いて大衆に普及させることは困難でした。しかし、優れた文才に恵まれた学者の家の出であったり、高い教養を持つ女性も少なくなかったことから、「魂が宿る言葉」をできるだけ短期間

(表 2) 平仮名成立過程の推測

※子音と母音はヘブライ文字とパラミア文字から選別

平仮名	子音	母音	合字	草書体	漢字
あ	ア	イ	ア+イ	𐤀𐤁	安
い	イ	イ	イ+イ	𐤁𐤁	以
う	ウ	ウ	ウ+ウ	𐤀𐤅	宇
え	エ	イ	エ+イ	𐤀𐤅	衣
お	オ	ウ	オ+ウ	𐤀𐤅	於
か	カ	ア	カ+ア	𐤀𐤀	加
き	キ	イ	キ+イ	𐤀𐤁	機
く	ク	ウ	ク+ウ	𐤀𐤅	久
け	ケ	エ	ケ+エ	𐤀𐤅	計
こ	コ	ウ	コ+ウ	𐤀𐤅	己
さ	サ	ア	サ+ア	𐤀𐤀	左
し	シ	イ	シ+イ	𐤀𐤁	之
す	ス	ウ	ス+ウ	𐤀𐤅	寸
せ	セ	イ	セ+イ	𐤀𐤁	世
そ	ソ	ウ	ソ+ウ	𐤀𐤅	曾
た	タ	ア	タ+ア	𐤀𐤀	太
ち	チ	イ	チ+イ	𐤀𐤁	知
つ	ツ	ウ	ツ+ウ	𐤀𐤅	川
て	テ	エ	テ+エ	𐤀𐤅	天
と	ト	ウ	ト+ウ	𐤀𐤅	止
な	ナ	ア	ナ+ア	𐤀𐤀	奈
に	ニ	イ	ニ+イ	𐤀𐤁	仁
ぬ	ヌ	ウ	ヌ+ウ	𐤀𐤅	奴
ね	ネ	エ	ネ+エ	𐤀𐤅	祢
の	ノ	ウ	ノ+ウ	𐤀𐤅	乃
は	ハ	ア	ハ+ア	𐤀𐤀	波
ひ	ヒ	イ	ヒ+イ	𐤀𐤁	比
ふ	フ	ウ	フ+ウ	𐤀𐤅	不
へ	ヘ	エ	ヘ+エ	𐤀𐤅	部
ほ	ホ	ウ	ホ+ウ	𐤀𐤅	保
ま	マ	ア	マ+ア	𐤀𐤀	末
み	ミ	イ	ミ+イ	𐤀𐤁	美
む	ム	ウ	ム+ウ	𐤀𐤅	武
め	メ	エ	メ+エ	𐤀𐤅	女
も	モ	ウ	モ+ウ	𐤀𐤅	毛
や	ヤ	ア	ヤ+ア	𐤀𐤀	也
ゆ	ユ	イ	ユ+イ	𐤀𐤁	由
よ	ヨ	ウ	ヨ+ウ	𐤀𐤅	与
ら	ラ	ア	ラ+ア	𐤀𐤀	良
り	リ	イ	リ+イ	𐤀𐤁	利
る	ル	ウ	ル+ウ	𐤀𐤅	留
れ	レ	エ	レ+エ	𐤀𐤅	礼
ろ	ロ	ウ	ロ+ウ	𐤀𐤅	呂
わ	ワ	ア	ワ+ア	𐤀𐤀	和
を	ヲ	イ	ヲ+イ	𐤀𐤁	造
ん	ン	ウ	ン+ウ	𐤀𐤅	无

に、世間により広く普及させるためには、誰もが容易く読み書きすることができる文字の創作が不可欠となりました。そして漢字習得のハードルが高いことを熟知していた空海は、漢字と片仮名による漢文の普及に見切りをつけ、簡単に表記できる表音文字だけで日本語の表記を完結することができるように目論んだのです。その結果、空海が創作したのが平仮名です。平仮名とは、難しい漢字を学ばなくても、女性も含めて誰もが、日本語の発音に基づいて文章を読み書きすることを目指して創作された、日本独自の文字形だったのです。それは、片仮名と共存することとなる、新しい仮名文字の誕生を意味していました。

平仮名の創作手順とは

ではどのようにして平仮名が創作されたのか、具体的にその過程を想定してみましょう。平仮名は片仮名に対しての差別化を図り、日本に土着する文字として独自性を打ち出すことを目標とした文字です。片仮名は、日本語の発音を単に表記する必要性が

ら生まれた文字であり、古ヘブライ・古アラム文字をそのまま流用して、文字形が考案されたと考えられます。文字の形状からして、片仮名がこれら西アジア系の文字をベースにして考案されていることは明白ですが、それだけに、不必要な民族的感情を煽る危険さえ孕んでいました。それゆえ平安時代の初期、平仮名を創作するにあたっては、文字ルーツがあまり表立ってわからないような工夫がされたことでしょう。そして片仮名とは一線引くために、同じ西アジア系の文字でも、当時の世代により近い、前一世紀の死海文字や、その数世紀後に渡りアラム文字が進化して普及したパルミア文字が参照されたのです。これらは、それまでの古ヘブライ系・アラム系とはその形状が若干異なり、特にパルミラ文字は大胆な曲線が印象深く目に映ります。これらのヘブライ文字やパルミア文字の形をそのまま流用して、その母音と子音を多少の工夫を凝らしながら重ねると、片仮名よりも丸みを帯びた、流線型の文字を象ることができます。こうして完成した平仮名は、片仮

名の形状の余韻は残す文字も多少は残されたものの、その流線を駆使した文字の形状はかつてない、独特なものとなり、結果として、原型として用いられた西アジア系の文字とは、およそ似つかない文字形となったのです。卓越した文字デザインの工夫を凝らし、草仮名も参照して考案されたと考えられる平仮名は、一見、万葉仮名を崩して創作されたように見えますが、実は、ヘブライ文字とパルミア文字を流用して作りあげられた文字の結晶だったのです。

平仮名と片仮名が共存する理由

片仮名と平仮名、そして漢字が古くから共存し、その利用価値においてふつかりあうことがなかったのは、それぞれが異なる目的をもって、その用途が明確に分かれていただけでなく、それらの文字を利用する文才家の出自や性別も異なっていたからと考えられます。和の柔らかいイメージを持つ丸みを帯びた平仮名は、独自の、日本的な優しい表記方法を目指し、特に漢文とは縁の薄い非支配階級や知識層、及び女性に多く用いられました。そして

多少の漢字を交えながら、日本固有の和文で書かれた日記や和歌、物語などに用いられ、また女性的な手紙等の文章にも広く用いられました。平仮名は、漢字の存在に拘束されることなく、日本語を美しく、その思いや心まで直接的な表現をもって書き綴ることに用いられ、日本語の文字文化の在り方を一変させることになりました。こうして平仮名は日本固有の文字として、自由に文学や庶民の世界で用いられてきました。しかしながら、平仮名が草案されても、漢字を無くして、それにとって代わる文字が望まれた訳ではありませんでした。漢字は日本と中国を結ぶ文化交流の絆の骨子であり、漢文による文字文化から始まった日本の文字文化であるが故、もはや大陸の文化の象徴でもある漢字は捨てることのできない貴重な存在となっていたのです。しかも古代社会においては、仮名文字が普及し始める以前の長い期間、文書そのものが漢文本位に形成され続けてきたことから、漢文の流れを踏襲することがいつのまにか、政治や学問の世界では不可欠になっ

ていました。つまり、漢字の存在は既に日本の文字文化に深く根付いていただけでなく、漢字の便利さにも執筆者が依存して慣れ切っていたことでしょう。そして片仮名においては、漢字を尊び、漢文の流れに拘束されながらも、漢字と片仮名を混合した文章形成に用いられるようになります。そして漢字と片仮名を併用することが、いつしか権威の家徽となり、暗黙のうちに印象づけられるようになります。その力強いイメージ故に、片仮名は学問や政治の世界で多用され、特に公文書においては、戦時中まで多用されることとなります。戦後に至り、昭和21年には今日知られる仮名づかいが、そして昭和48年には当用漢字音訓表が制定されることとなります。漢字が日本に持ち込まれた古代からの歴史の流れの中で、今日、私たちが理解する日本語の表記方法が国家により初めて制定されるまで、2000年近くの年月が経ったのです。

連載中の歴史コラムは随時更新して <http://www.history.jp.com/> に掲載しています。是非、ご覧下さい。

成田グルメNAVI

第85回

何度でも行きたくなる魅惑のとんかつ店
ありが豚

今回は成田空港にほど近く、地元でも評判のとんかつ専門店「ありが豚」をランチタイムに再訪した。ランチ限定メニューとして旭市産の銘柄「いもぶた」を使用したとんかつ定食と、より大ぶりの上とんかつ定食がオススメとのこと、今回は奮発して上とんかつ定食1,500円をオーダー。店内は知る人ぞ知るといった雰囲気溢れ、近隣の空港関係者が足繁く

通っているように期待が高まる。先にすり鉢と胡麻が運ばれてきて、ソースに添えるためのすり胡麻を作る工程が何とも楽しい。胡麻をすりながら待っていると、一般的なサイズの1.5倍程あろうかというとんかつ、ライス、味噌汁が運ばれてきた。とんかつは甘みのある豊かな風味と、ほろりとした柔らかな歯ごたえ。サクとした衣は、ぱくぱくとイける軽さが嬉しい。極細千切りキャベツは、胡麻ドレッシングとよく絡み相性抜群。元々ボリュームがある上に、ご飯&キャベツはお替り自由なので、女性には若千多く感じるかもしれないが、食後は「満足！」な気持ちに、そしてまた食べたくなる味である。

ありが豚
千葉県成田市取香560
☎0476-33-0777
【火~土曜 11:30~14:00 17:30~21:30】



総合評価★★★★☆

カリフォルニアのおいしい水 アクアヴィル

AQUAVILLE

PURIFIED DRINKING WATER 500ml × 24本

お手頃な価格でお届けします。
携帯でのご注文はこちら

478円

フィットネスハウス
☎0476-89-3111

全国どこでも送料 420円
※一部地域、離島は除く

中古スチールデスク 大特価 1,000円

何にでも使えて便利 パレット

無料でお届けします!

※直接引き取りに来られる方のみ

▼携帯で確認
他にもサイズと型色があります!

幅 × 奥行き × 高さ
・100×69×72cm
・160×80×72cm
・140×69×72cm

野毛平工業団地・清掃工場近く (株)ロジハウス (株)サウンドハウス内
TEL:0476-89-2227
千葉県成田市新泉14-3 (平日 9:00~19:00・土曜 12:00~17:00)

やすらぎの天然温泉

数々の上質な癒して秋を満喫する

湯 成田の命泉

開放感あふれる露天風呂。シャワーやサウナで、心身ともにリフレッシュしませんか

【効能】 神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、運動麻痺、関節のこわばり、うちみ、くじき、慢性消化器病、痔疾、冷え性等

癒 一流の施術師によるボディケア

ボディ・フット・アロマ、カイロプラクティック、各種専門施術師によるケアで心身共にリラックス

食 料 理

季節ごとの料理を楽しむことができる創作和風ダイニング

淡路島から日々直送

おひ彩 (800円)

お刺身 (800円)

www.yamatonoyu.com
0476-28-8111

入館料 | 平日: 700円 土日祝: 1000円
※小学生の入館料: 300円 (大人同様の総の倍)
営業時間 | 10:00-22:00
※年中無休(全館禁煙)

JR 成田駅から1駅の下総松崎駅から徒歩20分
房総風土記の丘・坂田池公園に隣接。大駐車場完備

成田市 社 ① 広告デザインスタッフ ② 物流倉庫管理スタッフ

業績好調につき社員・パート大募集!

楽器・音響機器のネット通販で国内トップ!

広告デザイン DTP 経験者歓迎
illustrator, photoshop 等による
自社カタログ・音楽雑誌の広告など
紙媒体のDTPデザイン・制作業務

倉庫管理スタッフ フォークリフト経験者
中型自動車免許持者
新たな人材を20名募集します!
未経験者も多数活躍中。入庫管理、
通関業務、商品のピッキング・梱包等

月給: 21万円~35万円 月給: 19万円~32万円
時給: 1200円~1500円 時給: 1000円~1150円
サウンドハウス ※Indesign 経験者歓迎します ロジハウス ※物流倉庫管理 経験者は25万円~

営業・商品発注スタッフ等同時募集中!
当社ホームページにて確認下さい

応募 ▶ 右記まで履歴書(写真貼付)をE-mailまたは郵送。
書類選考の上、面接日を連絡致します。

〒286-0825 千葉県成田市新泉14-3
job@soundhouse.co.jp (担当 採用係)

株式会社 ロジハウス ☎0476-89-1777
株式会社 サウンドハウス www.soundhouse.co.jp

WEB サイト案内

日本シティジャーナルをご覧いただきありがとうございます。
本紙のバックナンバーはWEBサイトにすべてご覧頂けます。
連載中の歴史に関するコラムは最新情報に随時更新して
スペシャルサイト「日本とユダヤのハーモニー」にまとめて
あります。また、ご意見・ご要望等をお待ちしております。
FAX やホームページからお寄せ下さい。

日本シティジャーナル: <http://www.nihoncity.com/>
日本とユダヤのハーモニー: <http://www.historyjp.com/>

編集後記

今月執筆した日本語の記事は、沖縄で執筆しました。エイサー祭りや、史跡を見に初めて訪れた沖縄は、とても美しく、のどかな雰囲気がとても印象的でした。速度40kmという県道で、自動車が30kmで走っていることから、時間を感じさせない島の空気を肌で感じ取ることが出来ます。日本の古代史は淡路島から始まっていると言われてはいますが、それ以前、大陸からの渡来者は、まず沖縄を経由した可能性があるのかなと思う昨今です。それ程、沖縄には古代からの風習が多く残されています。

NCJ 編集長
中島 尚彦
1957年東京生まれ。14歳で米国に単身テニス留学。ウォートンビジネススクール卒業後、ロスアンゼルスにて不動産デベロッパーとして起業。米国ビジネス最前線で活躍する。1990年に帰国後、成田においてサウンドハウスを立ち上げる。現在ハウスホールディングス代表、日本シティジャーナル編集長を兼務。趣味はギターとマラソン、アイスホッケー、及び日本古代史研究。